

鄧輝燿とベトナムにおける「二十四孝原編」

佐藤 トウイウエン

Dang Huy Tru and 「二十四孝原編」 in Vietnam

SATO Thuy Uyen

「二十四孝原編」(a printed book, now in the possession of the Hanoi Sino-Nom Research Institute) was edited in 1867 by Dang Huy Tru (鄧輝燿, and was included in 『四十八孝詩畫全集』). However, until now there has been virtually no research done in Vietnam on 「二十四孝原編」. This paper will compare the 「二十四孝原編」(included in 『四十八孝詩畫全集』) in Vietnam with the 「二十四孝原編」(carried in 『三餘堂叢刻』) of China to clarify its reception, diffusion and transformation in Vietnam. We point out that both of them have similar contents and that 「二十四孝原編」(carried in 『三餘堂叢刻』) is the original manuscript of the 「二十四孝原編」(included in 『四十八孝詩畫全集』). However, it was not regarded as the original manuscript. It can be argued that 「二十四孝原編」(included in 『四十八孝詩畫全集』) reveals characteristic features of Vietnamese style.

はじめに

『四十八孝詩畫全集』（以下、『全集』と略称）は、鄧輝燿が中国の朱文公「二十四孝原編」、高月槎「二十四孝別集」を収録したもので、1867年に刊行された。いわば、『全集』は中国の「二十四孝原編」、「二十四孝別集」をベトナムに伝えたわけであるが、内容はまったく同一ではなく、一部改変が加えられており、ベトナム独自の避諱改字も見られるようである。そこで『全集』所収の「二十四孝原編」、「二十四孝別集」を中国の「二十四孝原編」、「二十四孝別集」と比較することによって、ベトナムにおける二書を受容、変遷を確認できると思われる。ただし、本稿では紙幅の関係上、『全集』所収の「二十四孝原編」に焦点を当てる。一方、現在見ることのできる中国の「二十四孝原編」は、『三餘堂叢刻』（以下、『叢刻』と略称）所収本のみであり、目下のところ『叢刻』所収本よりも古い「二十四孝原編」は見あたらない。

『全集』についての研究は管見の限り、許端容「河内漢喃研究院蔵《四十八孝詩畫全集》考辨」（『華岡文化學報』第22期、中国文化大学文学学院、1998年）がある。しかし、許氏の論文は『全集』の創作時期、作者の経歴を紹介するものの、作者については序文に記される情報のみに従い、簡単に言及するにとどまっている。また、許氏は『全集』と中国の「二十四孝原編」、「二十四孝別集」を比較し、「時」、「宗」、「洪」、「華」という四つの避諱改字があることを指摘しているが¹⁾、筆者の調査によれば、これ以外にも避諱改字があるようである。このほか、許氏の論文では鄧輝燿の七言絶句を紹介せず、凶版に関しても特に論じていない。

そこで、本稿では、許氏の研究を踏まえつつも、『全集』所収の「二十四孝原編」を『叢刻』所収の「二十四孝原編」と文献学的に比較し、ベトナムにおける「二十四孝原編」の受容、変遷を明らかにしたい。

一. 作者の履歴

鄧輝燿（ダン・フィ・チュー、Đặng Huy Trứ）の経歴について書かれた資料としては、管見の限り、*Thư mục Hán Nôm—mục lục tác giả*²⁾（『漢喃書目—作者目録』）、*Lược truyện các tác gia*

1) 許端容「河内漢喃研究院蔵『四十八孝詩畫全集』考弁」『華岡分科学報』第22期、民国87年3月、105～122頁を参照。

2) Ban Hán Nôm thư viện khoa học xã hội, *Thư mục Hán Nôm—mục lục tác giả* 『漢喃書目—作者目録』（Ủy ban khoa học xã hội Việt Nam 出版、1977年）、45頁。

*Việt Nam*³⁾ (『ベトナム作者たちの略伝』)、*Tên tự tên hiệu các tác gia Hán Nôm Việt Nam*⁴⁾ (『ベトナム漢喃の作者の字、号』)、*Từ điển văn học bộ mới*⁵⁾ (『文学字典』新版)、*Danh nhân lịch sử Việt Nam—Tập 2*⁶⁾ (『ベトナムの歴史の名人』第2冊)、*Danh nhân Hà Nội*⁷⁾ (『ハノイ名人』)、『大南寔録』、『大南正編列傳』二集、『大南一統志』の9点が確認される。このうち『大南寔録』および『大南正編列傳』二集、『大南一統志』のみが漢文で書かれ、他の6点は現代ベトナム語の文献である。以下、最も基本的な資料である『大南寔録』、および『大南正編列傳』二集、『大南一統志』の関連記述を引用しておく。

まず『大南寔録』には、

癸卯紹治三年、是科取中舉人承天場三十九人〔……鄧輝燿、陳宜東、阮永貞……〕⁸⁾。

丁未紹治七年春三月、會試命署禮部尚書潘清簡充主考……是科中格、阮文顯、鄭履亭、潘叔直、武文敷、鄭春賞、黃善長、鄧輝燿、阮德滋、八人。……燿綜督鄧文添之任也、第一場兼治五經文理可觀、二三場用字欠雅爲場官黜落。帝命將原卷進覽不忍以瑕疵見棄、特準預中入殿試以盡其能⁹⁾。

丁未紹治七年夏四月、殿試命羽林左翊統制阮仲併充監試、……帝再三披覽謂諸大臣曰、……惟鄧輝燿言辭放肆行文又犯場規〔今文有莠害嘉苗之句。嘉苗貴鄉名地。帝以示大臣張登桂奏曰、燿於會試既當黜、殿試復如此、文衡公器豈宜泛濫遂落。燿第再革去舉人名籍、遂回學習。殿試被黜自燿始〔次科燿復中解元〕¹⁰⁾。

丁未紹治七年秋七月、是科承天場取中四十六名〔鄧輝燿、黎有棣、潘顯道……〕¹¹⁾。

甲子嗣德十七年冬十月、廣南布政使鄧輝燿、請立業戶收產稅、令織戶領錢織項輸納。帝曰、用土產作貢禹貢良法。……本國但以錢、粟充稅居多、產物之稅少、常需多欠不免

3) Trần Văn Giáp, *Lược truyện các tác gia Việt Nam* 『ベトナム作者たちの略伝』(Văn học 出版社、2000年)、403~404頁。

4) Trịnh Khắc Mạnh, *Tên tự tên hiệu các tác gia Hán Nôm Việt Nam* 『ベトナム漢喃の作者の字、号』(Khoa học xã hội 出版社、2002年)、441~442頁。

5) Đỗ Đức Hiểu 他, *Từ điển văn học bộ mới* 『文学字典』新版(Thế Giới 出版社、2004年)、604~605頁。

6) Đinh Xuân Lâm & Chương Thâu, *Danh nhân lịch sử Việt Nam—Tập 2* 『ベトナムの歴史の名人』第2冊(Giáo dục 出版社、1988年)、81~82頁。

7) Vũ Khiêu, *Danh nhân Hà Nội* 『ハノイ名人』(Hà Nội 出版社、2004年)、625~632頁。

8) 阮朝国史館『大南寔録』正編第三紀卷三十二「大南寔録十三」(慶応義塾大学言語文化研究所、1977年)、433頁。〔 〕内は双行注。

9) 阮朝国史館『大南寔録』正編第三紀卷六十六「大南寔録十四」(慶応義塾大学言語文化研究所、1977年)、389頁。

10) 注9所掲の阮朝国史館『大南寔録』正編第三紀卷六十七「大南寔録十四」、400~401頁。

11) 注9所掲の阮朝国史館『大南寔録』正編第三紀卷七十「大南寔録十四」、430頁。

和買、公私皆不便。茲當如何便問民而公用當充。聽問地方商覆交廷臣議行之。準京外及社民建立義塚。亦從廣南布政鄧輝燿之請也。……兵部右參知協理水師阮論、冗擾兵丁〔差發私役索賄錢財〕爲原掌印鄧輝燿指參。……輝燿指參得寔賞加一級¹²⁾。

丙寅嗣德十九年、帝然之至是冊上論謂、……賞阮知方以下四十餘人陞授開復加級有差〔……鴻臚寺卿原領廣南布政鄧輝燿……均屬勤幹……〕。辦理戶部鄧輝燿奏請設平準使司、且言經商末技而益國裕民、乃是朝廷大政。其間節目繁多、必須諳熟諸地方行情、及一切去來要路、乃能建議可底于行、乃令前往察辦因。以輝燿充領平準使司¹³⁾。

甲戌嗣德二十七年秋七月、寧太孛辦鄧輝燿卒于河內高燈社遺言權葬其地。……帝曰、鄧輝燿稍有學問、亦非無用之徒。……加恩給錢一百緡給諸其家。準省送歸葬〔廣田縣〕¹⁴⁾。

とある。

次に、『大南正編列傳』二集には、

輝燿、字黃中、文添之姪也。父文憫以五科秀才終焉。輝燿少穎異有神童名。紹治三年、領鄉薦連會中格、以殿試用字欠謹被黜、七年、再拔解。嗣德初歷、知縣府有政聲、入爲監察御史遷掌印。辰有協理水師參知阮論、同籍人也、冗擾兵丁、私取材木。輝燿聲參得寔、拔鴻臚寺卿領廣南布政使。在職三年、疏請立業戶收產稅、又請京外社民設立義塚竝、準議行。十九年、改回辦理戶部、請設平準使司、且言商賈末技而益國裕民乃是朝廷大政、其間節目繁多必須諳熟諸地方情形、及一切去來要路、乃能建議可底于行。帝從之、命領其職前往諸海外籌辦嗣以耗欠公本錢降著作、充寧太孛辦責以充賠。二十七年、卒于河寓。輝燿慷慨有大志、未卒所圖齋志以沒、識者惜之。卒之日、囑以權葬于其地、既而河內省臣以聞。帝曰、輝燿稍有學問亦非無用、加恩給錢一百緡、又準省臣送回原貫安厝。平生著述有黃中文抄、四十八孝紀事新編、康熙耕織圖、越史聖訓演音、五戒演歌、又鐫刻從政遺規、二味集等部其藏板今畱在河內省舖……¹⁵⁾。

とある。

さらに、『大南一統志』には、

鄧輝燿〔文添之姪、少穎異有神童名。紹治七年、領鄉薦。嗣德初、授知縣有政聲、歷

12) 阮朝国史館『大南寔録』正編第四紀卷三十「大南寔録十六」（慶応義塾大学言語文化研究所、1979年）、256頁～257頁。

13) 注12所掲の阮朝国史館『大南寔録』正編第四紀卷三十四「大南寔録十六」、329～330頁、339～340頁。

14) 阮朝国史館『大南寔録』正編第四紀卷五十一「大南寔録十七」（慶応義塾大学言語文化研究所、1980年）、349頁。

15) 阮朝国史館『大南正編列傳』二集、卷二十「大南寔録二十」（慶応義塾大学言語文化研究所、1981年）、225頁。

官南定布政使。改回辦理戸部、奏請設平準使司、許之、命領其職。因獲咎降著作、充寧太掣尋卒。輝燾慷慨有大志、未卒所圖齋志以沒、識者惜之。平生著述有黃中文詩文抄、四十八孝紀事新編、康熙耕織圖、越史聖訓演義、五戒演歌、又鐫刻從政遺規、二味集等部¹⁶⁾。

とある。

これらと現代ベトナム語の資料6点の記述をあわせて鄧輝燾の経歴と作品について整理すれば、以下のようになる。

鄧輝燾は、字を黃中 (Hoàng Trung)、号を望津 (Vọng Tân) もしくは醒齋 (Tỉnh Trai) という。承天省廣田県博望社の人であり、明命6年(1825)に生まれた。総督鄧文添の甥である。幼い時、神童として有名であったという。紹治三年(1843)、挙人(郷試合格者)となり、同七年(1847)に会試に合格する。その後、殿試で文字の使用が適切でなかったため落第し、挙人の資格も失ったが、同年七月、丁未科解元となる。嗣徳9年(1856)広昌知県、そして春長知府に補せられた。嗣徳14年(1861)、都の監察御使に抜擢され、嗣徳17年(1864)、広南布政使となった。嗣徳19年(1866)、鴻臚寺卿の爵号を授与され、辦理戸部、平準使司という職も授けられた。嗣徳18年(1865)および嗣徳20年(1867)に広東、澳門、香港に派遣され、フランス軍の状況を探索しフランスと戦うための武器を購入した。一方、ベトナムに写真撮影の技術を採り入れた先駆者でもあり、教育、文化、政治、経済、外交、軍事などの様々な分野において大きく貢献している。彼は朝廷内での主戦派であり、フランスと戦う責務を最後まで全うした。そして黃佐炎(ホアン・タ・ヴィエム、Hoàng Tá Viêm)とともにフランスと戦い、嗣徳27年(1874)河内高燈社で亡くなった。嗣徳帝は「輝燾は学問があり、無用の人ではない」と褒め、恩賞として錢一百緡を与え、彼を故郷で葬るように命じたという。

鄧輝燾の作品としては、*Đặng Hoàng Trung ngũ giới pháp thiếp* (『鄧黃中五戒法帖』)、*Đặng Hoàng Trung thi sao* (『鄧黃中詩抄』)、*Đặng Hoàng Trung văn sao* (『鄧黃中文抄』)、*Sách học vấn tân* (『策學門津』)、*Tứ giới thi* (『四戒詩』)、*Tứ thập bát hiếu thi họa toàn tập* (『四十八孝詩畫全集』)、*Tự trị yên đồ phương thư* (『自治煙賭方書』)、*Bách duyệt tập* (『百悅集』)、*Nhĩ Hoàng di ái lục* (『珥潢遺愛錄』)、*Tứ thư văn tuyển* (『四書文選』)、*Từ thụ yếu quy* (『辭受要規』)などの著作や編著があった。このほか、*Dương Đình phú lược* (『陽亭賦略』)、*Nhị vị tập* (『二味集』)、*Thanh Khang Hy ngự đề canh chúc đồ phó bản* (『清康熙御題耕織圖副本』)、*Trương Quảng Khê thi văn* (『張廣溪詩文』)に詩文、序文あるいは跋文が収められている。

16) 劉徳称等『大南一統志』第一輯卷三(印度支那研究會、1941年)、378~379頁。〔 〕内は双行注。

このように、鄧輝燿は国家・民衆のために活躍した官僚、教養人であり、文才に富む愛国者であったといえよう。

二. 『四十八孝詩畫全集』の形態

1. 作品の誕生の背景および創作の動機

本作品の誕生の背景および創作の動機は「四十八孝詩畫全集序」に明記されている。そこに、

夫孝者天之經也、地之義也、民之行也。一孝立而萬善從矣。歷觀前古上自天子下達庶人、以孝徳顯者。播在丹青非一筆□□□¹⁷⁾也。丁巳春余試和榮得李文禎□□前後二十四孝詩畫、心甚悦焉、取而題以詩將使童習者、因事以得詩、且因詩以得畫也。後其詩登草、畫遂不傳。夫感応人心固莫善乎詩而啓發童蒙尤莫善乎畫、蓋童性好畫、因其好而導之以趨於善是亦教兒嬰孩之一術也。然則四十八孝有詩矣、可無畫乎歲之夏復如東得善畫者。圖其事跡於詩之左、因別爲集、顔曰四十八孝詩畫、廼壽之梨棗、以不朽、他日兒孫傳習、畫以養其目、詩以養其心、而秉彝好徳之良、偶於嬉戯間、油然以生孩提而愛、五十而慕、且能立身揚名以顯其父母、是集亦小補云。嗣徳萬萬年之二十歳丁卯冬十月既望欽 派如東公幹 誥授中順大夫鴻臚寺卿辦理戸部事務丁未科解元望津醒齋黃中子鄧氏輝燿書於廣東河南長庚寓舎之東窗¹⁸⁾。

とある。

ここに記されているとおり、鄧輝燿は嗣徳丁巳（1857年）に李文禎から「前後二十四孝詩畫」を得て、心から悦んだ。「前後二十四孝詩畫」には詩と画を載せており、詩は心を、画は目を養う。児童は画を好むから児童に人としての道を守り行なうことを教育すべく本書を撰述したという。阮朝は「孝」教育の実施や「孝」の勸奨を重視していたため、鄧輝燿が『全集』を編纂したのは自然な流れであった。

2. 著作年代

『全集』の扉の右側には「嗣徳丁卯冬新鐫」とあり、中央には「四十八孝詩畫全集」という書名が大字で記され、左側には「鄧黄中家草」とある（図1参照）。黄中は鄧の字である。

また、冒頭の「四十八孝詩畫全集序」には「嗣徳萬萬年之二十歳丁卯冬十月既望欽 派如東公幹 誥授中順大夫鴻臚寺卿辦理戸部事務丁未科解元望津醒齋黃中子鄧氏輝燿書於廣東河南長

17) □は欠字（1字分）を示す。

18) ハノイ漢喃研究院蔵『四十八孝詩畫全集』（AC.16）、第1葉表裏、第2葉表裏。

庚寓舎之東窗」とあり、本文冒頭右側には「望津醒齋黃中子鄧輝燿家草」、「門屬 龍編阮廷諒履忠校字」とある（図2参照）。

ここから、『全集』は鄧輝燿（字黄中、号望津、醒齋）によって中国の広東河南長庚寓舎で序が書かれ、阮廷諒によって校正されて、嗣徳二十年丁卯冬十月、すなわち1867年旧暦10月に刊行されたことがわかる。

3. 文献の構成

本書は全55葉の刊本で、高さ28センチ、幅19センチ。内容は、二つの序（「四十八孝詩畫全集序」、「詠前後二十四孝原序」）、「二十四孝原編」、「二十四孝別集」の順序で構成されている。また、各説話には「孝感動天」などの四文字の標題がつき、説話の本文へと続く。なお、各説話の終わりでは原本の「五言絶句」を鄧輝燿の自作の「七言絶句」の詩に代えて載せている。標題の下には双行注があり、上平聲〔一東韻〕から〔十二文韻〕まで、下平聲〔一先韻〕から〔十二侵韻〕まで記されている。また「二十四孝原編」の第一説話（大舜）の場合だけは、他の説話と異なり、標題下の双行注に「以下朱文公前二十四孝原編」と加えられている。全体の構成としては、見開きの右側に本文、左側に対応する画がある。版心には縦書きで「孝感動天」、「親嘗湯藥」などの標題が記されている（図3、図4参照）。

三. 『四十八孝詩畫全集』所収の「二十四孝原編」と中国の「二十四孝原編」の比較

すでに述べたとおり、現在見ることのできる中国の「二十四孝原編」は、『叢刻』本¹⁹⁾所収のみであるため、本節では、『全集』本所収の「二十四孝原編」は『叢刻』本所収の「二十四孝原編」を参考にして再編されたのか、またベトナムにおいてどのように改変されたのかを明らかにするため、両文献の本文と図版を比較してみる。

1. 孝子の順序の考察

順序	文献	『全集』	『叢刻』
1		1) 孝感動天 (大舜) ²⁰⁾	1) 孝感動天 (大舜)
2		2) 親嘗湯藥 (漢文帝)	2) 親嘗湯藥 (漢文帝)
3		3) 嚙指心痛 (曾參)	3) 嚙指心痛 (曾參)

19) 『叢刻』本所収の「二十四孝原編」の創作年代などについては佐藤トウイウエン、「李文馥系の「二十四孝」と『日記故事』」(『東アジア文化交渉研究』第7号、関西大学東アジア文化研究科、2014年3月)、259～276頁を参考されたい。

20) ()内は筆者が補ったものである。

4	4) 單衣順母 (閔損)	4) 單衣順母 (閔損)
5	5) 為親負米 (仲由)	5) 爲親負米 (仲由)
6	6) 戲綵娛親 (老萊子)	6) 戲綵娛親 (老萊子)
7	7) 鹿乳奉親 (郟子)	7) 鹿乳奉親 (郟子)
8	8) 賣身葬父 (董永)	8) 賣身葬父 (董永)
9	9) 行傭供母 (江革)	9) 行傭供母 (江革)
10	10) 扇枕温衾 (黄香)	10) 扇枕温衾 (黄香)
11	11) 涌泉躍鯉 (姜詩)	11) 涌泉躍鯉 (姜詩)
12	12) 刻木事親 (丁蘭)	12) 刻木事親 (丁蘭)
13	13) 為母埋兒 (郭巨)	13) 爲母賣兒 (郭巨)
14	14) 捨虎救父 (楊香)	14) 捨虎救父 (楊香)
15	15) 拾撻供親 (蔡順)	15) 拾撻供親 (蔡順)
16	16) 懷橘遺親 (陸績)	16) 懷橘遺親 (陸績)
17	17) 聞雷泣墓 (王裒)	17) 聞雷泣墓 (王裒)
18	18) 哭竹生笋 (孟宗)	18) 哭竹生笋 (孟宗)
19	19) 卧冰求鯉 (王祥)	19) 卧冰求鯉 (王祥)
20	20) 恣蚊飽血 (呉猛)	20) 恣蚊飽血 (呉猛)
21	21) 嘗糞憂心 (庾黔婁)	21) 嘗糞憂心 (庾黔婁)
22	22) 乳姑不怠 (唐夫人)	22) 乳姑不怠 (唐夫人)
23	23) 滌親溺器 (黄山谷)	23) 滌親溺器 (黄山谷)
24	24) 棄官尋母 (朱寿昌)	24) 棄官尋母 (朱寿昌)

この表からわかるように、二つの文献には孝子の順序に相違は見られない。これはいわゆる『日記故事』系に属する内容であり、そのことについてはかつて考察したことがある²¹⁾。

2. 本文の考察

内容の構成については、『叢刻』本所収の「二十四孝原編」は図版が先に掲げられ、裏頁に本文が記されているが、『全集』本所収の「二十四孝原編」は本文が先に置かれ、見開きの左頁に図版を入れる。また『全集』本には標題の下に「一東韻」などの双行注があるが、『叢刻』本にはない。そして、『全集』本では原本の五言絶句を鄧輝燿自作の七言絶句の詩に代えて、さらに避諱のため、文字の省略、文字の改変、欠筆という三つの書き方を用いている。避諱の文字は

21) 佐藤トウイウエン「李文叢系の「二十四孝」と『日記故事』」(『東アジア文化交渉研究』第7号、関西大学東アジア文化研究科、2014年03月) 259～276頁。

以下の表のとおりである。

『叢刻』	『全集』	避諱の方法
棉	「棉」 ²²⁾	欠筆（第四閔損の説話）
宗	「尊」 ²³⁾ 「尊」	別の文字に改変（第十八孟宗の説話） 別の文字に改変（第二十四朱壽昌の説話）
時	「節」 ²⁴⁾ 「時」を省略する。	別の文字に改変（第十九王祥の説話） 諱の文字を省略する（第十四楊香の説話、第二十一庾黔婁の説話、第二十四朱壽昌の説話）
任	「聽」 ²⁵⁾ 「莅」	別の文字に改変（第二十呉猛の説話） 別の文字に改変（第二十一庾黔婁の説話）

要するに、『全集』本は『叢刻』本を参考にして再編していることは明白である。しかし、細かく考察するとさまざまな違いがあるため、以下、各説話ごとにとりあげて比較検証してみた

22) 紹治帝の字である「綿宗」の「綿」と同音の「棉」を避けるため、欠筆して「棉」としている。このことは「紹治二年、……御雙名上一字左從糸右從帛嗣凡臨讀請讀作緜。臨文各隨文義改用、人名地名均不得冒用。惟皇弟請應免其改用仍遜帛旁一畫爲𦉳字。其從前冊籍有單用這字者請應加以黃黏。……紹治四年議準敬諱、偏旁請應改用該三十一字、〔……一字左從目中從糸右從帛字、一字左從女中從糸右從帛字、一字左從イ中從糸右從帛字〕とある。阮朝国史館『欽定大南會典事例』（天理大学図書館所蔵）卷百二十一、第9葉表以下を参照。

23) 紹治の字である「綿宗」の「宗」を避けるため、「尊」に改めている。紹治元年の諱の勅令には欠筆して「宗」としているが、紹治二年には通常の文章では「宗」を「尊」に改めるよう命じた。このことは『大南寔録』に、「辛丑紹治元年、禮部議上國諱諸尊字〔一臨文改用、臨讀避音、人名地名不得冒用、凡三字、左從日中從方右從定、上從日左從鬲右從虫、上從宀下從示〕……小字臨文稱呼惟禁不得連用、若單用宗字、凡於郊廟者著照樣直書餘職制、及臨文應用者著省一畫、臨讀者應稱為尊字亦足昭敬重」、「壬寅紹治二年、列廟徽號與玉牒、寔録中遇有應書人名、及臨文如有恭遇列聖徽號、亦準各敬缺一筆、至如臨文如係南国及北朝前代帝王廟號竝一切常用文字、準各隨文義或改為尊字、或別字者毋得仍前省畫餘依議行」とある。阮朝国史館『大南寔録』正編、「大南寔録十三」（慶応義塾大学言語文化研究所、1977年）第三紀卷四63頁、卷二十六366頁を参照。〔 〕内は双行注である。

24) これは嗣徳帝の名である阮福璘の「璘」の諱の同音の「時」を避けるためである。このことは『欽定大南會典事例』に、「紹治七年十月日 議奏恭照 御名字臨文改用臨讀避音人名地名不得用冒該三字〔一字左從日右從寺改用序、字上從山下從日同、又如寺刻之類照隨文義通暢凡係應改之字其義甚廣名以例推……〕。偏旁諸字臨文改用、人名地名仍不得冒用三十一字〔一字上+頭左從日右從寺、一字左從彡中從日右從寺、一字左從魚中從日右從寺、一字左從土中從日右從寺……〕とある。阮朝国史館『欽定大南會典事例』（天理大学図書館所蔵）卷百二十一、第14葉裏以下を参照。

25) これは嗣徳帝の字である「洪任」の「任」を避けるためである。このことは、『欽定大南會典事例』に「其朕小字〔左從彡右從共 左從イ右從壬〕與偏旁諸字臨文均準其行用、仍不得連用〔左從彡右從共 左從イ右從壬〕二字再各遜一畫足昭敬重。毋須改用別字。但臨讀避音與人名地名不得冒用、以合禮意」とある。〔 〕内は双行注。阮朝国史館『欽定大南會典事例』（天理大学図書館所蔵）卷百二十一、第16葉裏を参照。

い。

1 大 舜	全集	孝感動天〔一東韻 以下朱文公前二十四孝原編〕 ²⁶⁾ 虞舜、瞽瞍之子、性至孝、父頑母嚚、弟象傲、舜耕於歷山、象為之耕、鳥為之耘、其孝感如此、堯聞之、妻以二女、事以九男、使總百揆、二十有八載、遂讓位。 象是毛蟲鳥羽蟲 都君一孝動蒼穹 先教微物來相助 曆數當年已在躬
	叢刻	孝感動天 虞舜、姓名重華。瞽瞍之子、性至孝、父頑母嚚、弟象傲、舜耕於歷山、象為之耕、鳥為之耘、其孝感如此、陶於河濱、器不苦窳、漁於雷澤、烈風雷雨、弗迷、雖竭力盡、瘁而無怨懟之心、堯聞之、使總百揆、事以九男、妻以二女、相堯二十有八載、帝遂讓以位焉。 隊隊耕田象 紛紛耘草禽 嗣堯登寶位 孝感動天心

『叢刻』本では説話の内容を詳細に記しているが、『全集』本では省略されている箇所を確認できる。そして、『全集』本では「二十有八載」、「遂讓位」とあるが、『叢刻』本では「相堯二十有八載」、「帝遂讓以位焉」となっている。

2 漢 文 帝	全集	親嘗湯藥〔二冬韻〕 西漢文帝、高祖第三子、初封代王、生母薄太后病三年、帝目不交睫、衣不解帶、湯藥非□□□□進。賢孝聞天下。 深閨一夜夢蒼龍 亦帝山河屬代封 母病三年嘗藥進 扇爐不辨夏和冬
	叢刻	親嘗湯藥 前漢文帝、名恆。高祖第三子、初封代王、生母薄太后、帝奉養無怠、母病三年、帝為之目不交睫、衣不解帶、湯藥非口親嘗弗進、仁孝聞於天下。 仁孝臨天下 巍巍冠百王 漢庭事賢母 湯藥必親嘗

『全集』本では「文帝」の前に「西漢」とあるが、『叢刻』本では「前漢」とする。また、『全集』本では「帝目不交睫」、「賢孝聞天下」とあるが、『叢刻』本では「帝為之目不交睫」、「仁孝聞於天下」とある。『叢刻』本では「名恆」、「帝奉養無怠」の句があるが、『全集』本にはない。

26) [] 内は双行注。

3 曾 參	全集	嚙指心通〔三江韻〕 周曾參、事母至孝、嘗採薪山中、有客至、母無措、望參不還、乃嚙其指、參忽心痛、負薪歸、跪問故、母曰、客至、吾嚙指以悟汝爾。 倚門乍聽吠村彪 投杼如何慰客腔 欲動子心先嚙指 負薪歸去母心降
	叢刻	嚙指心通 周曾參、字子輿、孔子弟子、事母至孝、參嘗採薪山中、家有客至、母無措、望參不還、乃嚙其指、參忽心痛、負薪以歸、跪問其故、母曰、有急客至、吾嚙指以悟汝爾。 母指纔方嚙 兒心痛不禁 負薪歸未晚 骨月至情深

『全集』本では「嘗採薪山中」、「有客至」、「負薪歸」、「跪問故」、「客至」とあるが、『叢刻』本では「參嘗採薪山中」、「家有客至」、「負薪以歸」、「跪問其故」、「有急客至」となっている。『叢刻』本では「字子輿」、「孔子弟子」とあるが、『全集』本ではそれがない。

4 閔 損	全集	單衣順母〔四支韻〕 周閔損、早喪母、父娶後母、生二子、衣以棉絮、妬損、衣以蘆花、父令損御車、體寒失鞞、父察知故、欲出後母、損曰、母在一子寒、母去三子單、母聞改悔。 棉絮蘆花兩樣兒 寒單一語發良知 孝哉閔子人無間 千百年前舜有之
	叢刻	單衣順母 周閔損、字子騫、孔子弟子、早喪母、父娶後母、生二子、衣以棉絮、妬損、衣以蘆花、父令損御車、體寒失鞞、父察知故、欲出後母、損曰、母在一子寒、母去三子單、母聞改悔。 閔氏有賢郎 何曾怨晚孃 父前留母在 三子免風霜

『全集』本では「棉」とあるが、『叢刻』では「棉」となっている。『叢刻』本では「字子騫」、「孔子弟子」とあるが、『全集』本ではそれがない。

5 仲 由	全集	為親負米〔五微韻〕 周仲由、家貧、食藜藿、為親負米百里之外、親没、南遊楚、從車百乘、積粟萬鐘、累裯而坐、列鼎而食。嘆曰、欲食藜藿、為親負米、不可得也。 百里匆匆負米歸 食甘藜藿奉庭幃 累裯列鼎南遊日 風樹淒心每涕歔
-------------	----	--

叢刻	爲親負米 周仲由、字子路、孔子弟子、家貧、食藜藿之食、爲親負米百里之外、親沒、南遊於楚、從車百乘、積粟萬鐘、累榻而坐、列鼎而食、乃歎曰、雖欲食藜藿之食、爲親負米、不可得也。 負米供甘旨 甯忘百里遙 身榮親已沒 猶念舊劬勞
-----------	---

『全集』本では「食藜藿」、「南遊楚」、「嘆曰」、「欲食藜藿」とあるが、『叢刻』本では「食藜藿之食」、「南遊於楚」、「乃歎曰」、「雖欲食藜藿之食」とある。『叢刻』本では「字子路」、「孔子弟子」とあるが、『全集』本ではそれがない。

6 老 萊 子	全集	戲綵娛親〔六魚韻〕 周老萊子、楚人、至孝、奉二親極其甘脆、行年七十、言不稱老、著五綵斑斕之衣、爲嬰兒戲舞親側、又取水上堂、詐跌卧地、作小兒戲、以娛親。 堂前詐跌舞斑餘 學作孩兒慰起居 七十老翁猶道少 雙親喜氣溢門閭
	叢刻	戲綵娛親 周老萊子、楚人、至孝、奉二親極其甘脆、行年七十、言不稱老、著五綵斑斕之衣、爲嬰兒戲舞於親側、又取水上堂、詐跌卧地、作小兒戲、以娛親喜。 戲舞學嬌癡 春風動綵衣 雙親開口笑 喜氣滿庭闈

『全集』本では「戲舞親側」、「以娛親」とあるが、『叢刻』本では「戲舞於親側」、「以娛親喜」となっている。

7 鄉 子	全集	□□奉親〔七虞韻〕 周鄉子、性至孝、父母年老、俱患雙眼、思食鹿乳、鄉子乃衣鹿皮、去深山、入鹿羣中、取乳娛親、獵者欲射之、以清告、乃免。 順意謀求鹿乳娛 鹿衣山裏隻身孤 偶逢獵者彎弓射 一語纔能保髮膚
	叢刻	鹿乳奉親 周鄉子、性至孝、父母年老、俱患雙眼、思食鹿乳、鄉子順承親意、乃衣鹿皮、去深山、入鹿羣中、取鹿乳以娛親、獵者見而欲射之、鄉子具以情告、乃免。 老親思鹿乳 身掛鹿毛衣 若不高聲語 山中帶箭歸

『全集』本では「取乳娛親」、「獵者欲射之」、「以清告」とあるが、『叢刻』本では「取鹿乳以娛親」、「獵者見而欲射之」、「鄉子具以情告」となっている。『叢刻』本では「順承親意」とあるが、『全集』本ではそれがない。

8 董 永	全集	賣身葬父〔八齊韻〕 漢董永家貧、父死、賣身貸錢而葬、及去償工、路遇一婦求為妻、俱至主家、織縑三百疋一月完成、乃歸至槐陰、會所遂辭去。 貸葬朝朝歎父兮 天教僂女降為妻 償工一月縑三百 別去方知俗眼迷
	叢刻	賣身葬父 漢董永家貧、父死、賣身貸錢而葬、及去償工、路遇一婦求為永妻、俱至主家、令織縑三百疋乃回一月完成、歸至槐陰、會所遂辭而去。 葬父將身賣 仙姬陌上迎 織縑償債主 孝感動天庭

『全集』本では「一婦求為妻」、「織縑三百疋一月完成」、「乃歸至槐陰」、「會所遂辭去」とあるが、『叢刻』本では「一婦求為永妻」、「令織縑三百疋乃回一月完成」、「歸至槐陰」、「會所遂辭而去」となっている。

9 江 革	全集	行傭供母〔九佳韻〕 後漢江革、少失父、獨與母居、遭亂、負母逃難、數遇賊、欲劫去、革輒泣告有老母在、賊不忍殺、轉客下邳、貧窮裸跣、行傭以供母。 負母逃危子命 ²⁷⁾ 窮途遇賊一言諧 下邳轉作行傭客 為報三年鞠育懷
	叢刻	行傭供母 後漢江革、字次翁、少失父、獨與母居、遭亂、負母逃難、數遇賊、欲劫去、革輒泣告有老母在、賊不忍殺、轉客下邳、貧窮裸跣、行傭以供母、母便身之物、莫不畢給。 負母逃危難 窮途犯賊頻 哀求俱獲免 傭力以供親

『叢刻』本では「字次翁」、「母便身之物、莫不畢給」とあるが、『全集』本ではそれがない。

10 黄 香	全集	扇枕温衾〔十灰韻〕 後漢黄香、年九歲失母、躬執勤苦、事父盡孝、夏暑、扇涼其枕簟、冬寒、以身温其被席、太守劉護異而表之。 孝父深懷鞠子哀 冬温夏凜一嬰孩 何哉九歲兒無母 却似三千讀過來
--------------	----	--

27) この「乗」、字形は「乘」に近いが、この七言絶句の押韻、意味から考えると、「乖」であろう。

叢刻	扇枕温衾 後漢黃香、字文疆、年九歲失母、思慕惟切、鄉人皆稱其孝、躬執勤苦、事父盡孝、夏天暑熱、扇涼其枕簟、冬天寒冷、以身温其被蓆、太守劉護表而異之。 冬月温衾煖 炎天扇枕涼 兒童知子職 千古一黃香
-----------	---

『全集』本では「夏暑」、「冬寒」、「其被蓆」とあるが、『叢刻』本では「夏天暑熱」、「冬天寒冷」、「其被蓆」となっている。『叢刻』本では「字文疆」、「思慕惟切」、「鄉人皆稱其孝」とあるが、『全集』本ではそれがない。

11 姜 詩	全集	湧泉躍鯉〔十一眞韻〕 漢姜詩、事母至孝、妻龐氏奉姑尤謹、母性好飲江水、妻汲而奉之、母更嗜魚膾、夫婦作而進之、召鄰母共食、舍側忽有湧泉、味如江水、日躍雙鯉、詩取以供母。 汲江進膾備甘珍 養志心誠且召鄰 孝母敬姑天不負 湧泉躍鯉足娛親
	叢刻	湧泉躍鯉 漢姜詩、事母至孝、妻龐氏奉姑尤謹、母性好飲江水、妻汲而奉之、母更嗜魚膾、夫婦作而進之、召鄰母共食、舍側忽有湧泉味如江水、日躍雙鯉、詩取以供母。 舍側甘泉出 一朝雙鯉魚 子能知事母 婦更孝於姑

『全集』本では「龐氏」とあり、『叢刻』本では「龐氏」とするが、龐と龐は異体字にすぎない。『全集』本の散文部分は『叢刻』本とほぼ同文である。

12 丁 蘭	全集	刻木事親〔十二文韻〕 逸人傅丁蘭者、河内人、少喪考妣乃刻木為人髣髴親形、事之如生、其後、鄰人張叔妻從蘭妻有所借蘭妻跪拜木人不悅、不以借、叔醉疾來詈罵木人、以杖敲其頭、蘭還見木人色不悅、問之、妻具以告、昂奮劍殺張叔、吏捕蘭、蘭辭木人、木人為垂淚、郡縣嘉其至孝通神、圖其形於雲臺。 木像筵前禮意勤 儼然堂上奉嚴君 狡童惹出風波事 一像雲臺萬古聞
	叢刻	刻木事親 漢丁蘭、幼喪父母、未得奉養、長而念劬勞之恩、刻木爲像、事之如生、其妻久而不敬、以鍼戲刺其指、血出、木像見蘭、眼中垂淚、因詢得其情、即將妻棄之。 刻木爲父母 形容在自身 寄言諸子姪 及早孝共親

『全集』本は『叢刻』本とかなり異なる記述となっている。

13 郭 巨	全集	<p>為母埋兒〔一先韻〕</p> <p>漢郭巨、家貧、有子三歲、母減食與之、巨謂妻曰、貧乏不能供母、子又分之。盍埋此子、子可再有、母不可復得、妻不敢違、一日巨掘坑三尺餘、忽見黃金一釜、上有字云、天賜黃金、郭巨孝子、官不得奪、民不得取、〔此一事諸書皆曰埋、原編獨曰賣、與下文子可再有、掘坑三尺、二句文理不蒙應改從埋〕。</p> <p>□家供母為兒牽 愛母埋兒甚可憐 地下黃金天上□ 翻教骨肉兩周全</p>
	叢刻	<p>為母賣兒</p> <p>漢郭巨、字文舉、家貧、有子三歲、母減食與之、巨謂妻曰、貧乏不能供母、子又分母之食、盍賣此子、子可再有、母不可復得、妻不敢違、忽一日巨掘坑三尺餘、忽見黃金一釜、釜上有字云、天賜黃金、郭巨孝子、官不得奪、民不得取。</p> <p>郭巨思供給 賣兒願母存 黃金天所賜 光彩耀寒門</p>

『全集』本では「為母埋兒」、「子又分之」、「盍埋此子」、「一日」、「上有字云」とあるが、『叢刻』本では「為母賣兒」、「子又分母之食」、「盍賣此子」、「忽一日」、「釜上有字云」としている。『叢刻』本では「字文舉」とあるが、『全集』本ではそれがない。また『全集』本では「賣」を「埋」に改めており、それを説明する双行注（「此一事」以下）がある。

14 楊 香	全集	<p>搯虎救父〔二簫韻〕</p> <p>晉楊香、年十四歲、隨父豐往田中穫粟、父為虎曳去、香手無寸鐵、惟知有父、不知有身、踴躍向前、搯持虎頸、虎磨死而逝、父因得免。</p> <p>兒年十四尚天矯 一躍能令虎患消 孝子眼中惟有父 山君何物敢相撩</p>
	叢刻	<p>搯虎救父</p> <p>晉楊香、年十四歲、隨父豐往田中穫粟、父為虎曳去、時香手無寸鐵、惟知有父、而不知有身、踴躍向前、搯持虎頸、虎磨死而逝、父因得免於害。</p> <p>深山逢白額 努力搏腥風 父子俱無恙 脫離饞口中</p>

『全集』本では「香手無寸鐵」、「不知有身」、「父因得免」とあるが、『叢刻』本では「時香手無寸鐵」、「而不知有身」、「父因得免於害」となっている。『全集』本で「時」が省略されているのはベトナムの避諱による。

15 蔡 順	全集	拾樾供親〔三肴韻〕 漢蔡順、少孤、事母至孝、遭王莽亂、歲荒不給、拾桑樾以異器盛之、赤眉賊見而問曰、何異乎、順曰、黑者奉母、赤者自食、賊憫其孝、以白米三斗、牛蹄一隻贈之。 桑子凶年一大庖 黑將奉母當嘉穀 赤眉尚有天良者 米肉相貽似故交
	叢刻	拾樾供親 漢蔡順、字君仲、少孤、事母至孝、遭王莽亂、歲荒不給、拾桑樾以異器盛之、赤眉賊見而問曰、何異乎、順曰、黑者奉母、赤者自食、賊憫其孝、以白米三斗、牛蹄一隻贈之。 黑樾奉萱幃 啼饑淚滿衣 赤眉知孝順 牛米贈君歸

『叢刻』本では「字君仲」とあるが、『全集』本ではそれがない。『全集』本では「牛蹄」とあるが、『叢刻』本では「牛蹄」となっている。

16 陸 績	全集	懷橘遺親〔四豪韻〕 後漢陸績、年六歲、於九江見袁術、術出橘待績懷橘二枚、及歸拜辭、橘墮地、術曰、陸郎作賓客而懷橘乎、績跪答曰、吾母性所愛、欲以遺母、術大奇之。 客中懷橘報劬勞 童子知能異老饕 莫是背萱多義訓 六年前已誦我蒿
	叢刻	懷橘遺親 後漢陸績、字公紀、年六歲、於九江見袁術、術出橘待績懷橘二枚、及歸拜辭、橘墮地、術曰、陸郎作賓客而懷橘乎、績跪答曰、吾母性之所愛、欲歸以遺母、術大奇之。 孝弟皆天性 人間六歲兒 袖中懷綠橘 遺母事堪奇

『全集』本では「吾母性所愛」、「欲以遺母」とあるが、『叢刻』本では「吾母性之所愛」、「欲歸以遺母」となっている。『叢刻』本では「字公紀」とあるが、『全集』本ではそれがない。

17 王 裒	全集	聞雷泣墓〔五歌韻〕 魏王裒、事親至孝、母存日、性畏雷、既卒、葬於山林、每遇風雨、聞雷、即奔墓所、拜泣告曰、裒在此、母勿懼。 墓上奔來哭甚麼 生前母性畏雷多 試觀一節知純孝 未論哀哀涕蓼莪
	叢刻	聞雷泣墓 魏王裒、字偉元、事親至孝、母存日、性畏雷、既卒、葬於山林、每遇風雨、聞雷、即奔墓所、拜泣告曰、裒在此、母勿懼、隱居教授、讀詩至哀哀父母、生我劬勞、遂三復流涕、後門人至廢蓼莪之篇。 慈母怕聞雷 水魂宿夜臺 阿香時一震 到墓遶千回

『叢刻』本では「字偉元」、「隱居教授。讀詩至哀哀父母、生我劬勞。遂三復流涕。後門人至廢蓼莪之篇」とあるが、『全集』本ではその部分がない。

18 孟 宗	全集	哭竹生笋〔六麻韻〕 吳孟尊、少喪父、母老疾篤、冬月思笋羹、孟乃往竹林、抱竹而哭、須臾地裂、出笋數莖。持歸作羹奉母、食畢疾愈、 冬笋無羹母病加 竹林抱泣地抽芽 數莖歸作一杯食 堂北重開萱草花
	叢刻	哭竹生笋 吳孟宗、字恭武、少喪父、母老疾篤、冬月思筍煮羹食、宗無計可得、乃往竹林、抱竹而哭、孝感天地、須臾地裂、出筍數莖、持歸作羹奉母、食畢疾愈。 淚滴朔風寒 簫簫竹數竿 須臾冬筍出 天意報平安

『全集』本では「孟尊」、「冬月思笋羹」、「孟乃往竹林」、「出笋數莖」とあるが、『叢刻』本では「孟宗」、「冬月思筍煮羹食」、「乃往竹林」、「出筍數莖」となっている。『叢刻』本では「字恭武」、「宗無計可得」、「孝感天地」とあるが、『全集』本ではそれがない。『全集』本ではベトナムの避諱により「宗」が「尊」に改められている。

19 王 祥	全集	卧水求鯉〔七陽韻〕 □王祥、早喪母、繼母朱氏不慈、於父前數譖之、由□□愛於父、母欲食生魚。節值氷凍、祥解衣卧氷□□、氷忽自裂、雙鯉躍出、持歸供母。 □□□氷體未涼 水中雙鯉自洋□ 大心□□□如此 □是謀他繼母嘗
	叢刻	卧水求鯉 晉王祥、字休徵、早喪母、繼母朱氏不慈、於父前數譖之、由是失愛於父、母欲食生魚、時值氷凍、祥解衣卧氷求之、氷忽自裂、雙鯉躍出、持歸供母。 繼母人間有 王祥天下無 至今河水上 一片卧氷模

『叢刻』本では「字休徵」とあるが、『全集』本ではそれがない。『全集』本では「節值氷凍」とあるが、『叢刻』本では「時值氷凍」となっている。また『全集』本では避諱により「時」を「節」に改めている。

20 呉 猛	全集	恣蚊飽血〔八庚韻〕 晋呉猛、年八歳、性至孝、家貧、榻無幃帳、每夏夜、聽蚊攢膚、恣渠膏血之飽、雖多不驅、恐去已噬親也。 夏不驅蚊一念誠 愛親情至髮膚輕 竒哉八歳能如此 不愧當年剖血生
	叢刻	恣蚊飽血 晋呉猛、年八歳、性至孝、家貧、榻無幃帳、每夏夜、任蚊多攢膚、恣渠膏血之飽、雖多不驅、恐去已而噬親也、愛親之心至矣。 夏夜無幃帳 蚊多不敢揮 恣渠膏血飽 免使入親幃

『全集』本では「聽蚊攢膚」、「恐去已噬親也」とあるが、『叢刻』本では「任蚊多攢膚」、「恐去已而噬親也」となっており、『全集』本では避諱により「任」の代わりに「聽」が用いられている。また『叢刻』本では「愛親之心至矣」とあるが、『全集』本ではそれがない。

21 庾 黔 婁	全集	嘗糞憂心〔九青韻〕 南齊庾黔婁為孱陵令、到莅未旬日、忽心驚汗流、即棄官歸、父病始二日、醫云、欲知瘥劇、但嘗糞苦則佳、婁嘗之甜、心憂甚、至夕、稽顙北辰、求身代父死。 琴堂聞病急披星 甜苦寧辭糞味經 向北更求身代父 堂前一祝動天庭
	叢刻	嘗糞憂心 南齊庾黔婁為孱陵令、到任未旬日、忽心驚汗流、即棄官歸、時父病始二日、醫云、欲知瘥劇、但嘗糞苦則佳、婁嘗之甜、心憂甚、至夕、稽顙北辰、求身代父死。 到縣未旬日 椿庭遘疾深 願將身代死 北望起憂心

『全集』本では「到莅未旬日」、「父病始二日」とあるが、『叢刻』本では「到任未旬日」、「時父病始二日」となっている。『全集』本では『叢刻』本に記される「到任未旬日」の「任」を「莅」に改め、「時父病始二日」の「時」が省略されている。これらはいずれもベトナムの避諱による。

22 唐 夫 人	全集	乳姑不怠〔十蒸韻〕 唐崔山南、曾祖母長孫夫人、年高無齒、祖母唐夫人、每日櫛洗、升堂乳其姑、姑不粒食、數年而康、一日病篤、長少咸集、曰、無以報新婦恩、願汝孫婦、亦如新婦之孝敬。 堂上朝朝櫛洗升 乳姑不粒嘉年增 慰勸勸囑彌留際 孫婦當如祖奉曾
-------------------	----	--

叢刻	<p>乳姑不怠 唐崔山南、曾祖母長孫夫人、年高無齒、祖母唐夫人、每日櫛洗、升堂乳其姑、姑不粒食、數年而康、一日病篤、長少咸集、曰、無以報新婦恩、願汝孫婦、亦如新婦之孝敬。</p> <p>孝敬崔家婦 乳姑晨盥梳 此恩無以報 願得子孫如</p>
----	--

『全集』本の散文部分は『叢刻』本とまったく同文である。

23 黄 山 谷	全集	<p>滌親溺器〔十一尤韻〕 宋黃廷堅、元祐中為太史、性至孝、身雖貴顯、奉母盡誠、每夕、為滌溺器、無一刻不供子職。</p> <p>溺器非無婢妾流 貴能身滌更殊尤 若言穢賤難當得 兒溺當年母避不</p>
	叢刻	<p>滌親溺器 宋黃庭堅、字魯直、號山谷、元祐中為太史、性至孝、身雖貴顯、奉母盡誠、每夕、為親滌溺器、無一刻不供子職。</p> <p>貴顯聞天下 平生孝事親 親身滌溺器 婢妾豈無人</p>

『全集』本では「黄廷堅」、「為滌溺器」とあるが、『叢刻』本では「黄庭堅」、「為親滌溺器」となっている。『叢刻』本では「字魯直、號山谷」とあるが、『全集』本ではそれがない。

24 朱 壽 昌	全集	<p>棄官尋母〔十二侵韻〕 宋朱壽昌、年七歳、生母劉氏為嫡母所妬、出嫁、母子不相見者五十年、神尊朝棄官入秦、與家人訣誓、不見母不復還、行次於同州得之、母已七十餘、</p> <p>五十年来孺慕深 急辭榮祿誓相尋 同州一見歡無極 吹棘風清慰母心</p>
	叢刻	<p>棄官尋母 宋朱壽昌、年七歳、生母劉氏為嫡母所妬、出嫁、母子不相見者五十年、神宗朝棄官入秦、與家人訣誓、不見母不復還、行次於同州得之、時母七十餘。</p> <p>七歳生離母 參商五十年 一朝相見面 喜氣動皇天</p>

『全集』本では「神尊朝」、「母已七十餘」とあるが、『叢刻』本では「神宗朝」、「時母七十餘」となっている。『全集』本では避諱により「宗」を「尊」に改め、「時」を省略して表現を変えている。

3. 図版の考察

次に、図版について考察してみよう。まず、『全集』本の版心には縦書きで「孝感動天」などの標題が記してあるが、『叢刻』本の版心には標題がない。また、『全集』の図版は多くの場合、『叢刻』に比べて図版の上部および下部が広がっており、空白部分があったり、広域に描かれていたりする。全体として、『全集』本の図版は『叢刻』本によく類似していることは明白である。しかし、細かく考察すると、ところどころ違いがあるため、本節では違いの目立つ図版のみをとりあげて比較検証してみる。

『全集』本は『叢刻』本と比べると、山頂の形、飛んでいる一匹の鳥の姿などに相違点がある。鳥は「耘」すなわち雑草を刈り取る動物としてこの説話に登場するため、新たに加筆したのであろう。

『全集』本を『叢刻』本と比較すると、屋根の形や、関損が左手に鞭を持っていない点が異なっている。

『全集』本を『叢刻』本と比較すると、郊子の前に籠があることなどが異なっている。籠は鹿の乳を入れるものとして新たに描かれたのであろう。

『全集』本は、屋根の装飾、柵の形や、黄香の父親の後ろに机がある点で、『叢刻』本と異なっている。

『全集』本は木の形、庭にある石の形が『叢刻』本とやや異なっている。

『全集』本は玄関、床、墓の表現が『叢刻』本とやや異なっている。

『全集』本は雲、柵、玄関の装飾の意匠が『叢刻』本とやや異なっている。

おわりに

以上に考察したように、『全集』本「二十四孝原編」は本文の後に鄧輝燿自作の「七言絶句」の詩を挿入していることや省略があること、いくらか語釈をつけ加えていること、避諱改字が見られることが『叢刻』本と大きな相違をなしているといえよう。鄧輝燿が中国の原本の「二十四孝原編」の題詩を使用しなかった理由は、『全集』本の序文である「詠前後二十四孝原序」に「……一是朱文公原編一是高月榘先生別集皆一詩一畫。余披閱之。詩無佳句、畫有可采者」²⁸⁾と明瞭に記されている。中国の「二十四孝原編」所載の詩にはすぐれた句がないため、新たに書き起こしたというのである。説話の内容（ストーリー）についていえば「丁蘭」説話だけが全く違っているのを除けば、残る二十三人の説話は『叢刻』本所収の「二十四孝原編」とおおむね一致している。

一方、図版の場合、『全集』本所収の「二十四孝原編」の図は『叢刻』本所収の「二十四孝原編」と比較すると、一部改変を加えていることがあるが、全体的に見ればよく類似しており、かなり忠実な表現になっているといえる。また、1「大舜」および7「郟子」では、鳥と籠が新たに描き加えられているが、それは当該説話のストーリーをより明確にするためになされたものであった。中国の底本にもとづきつつ、よりすぐれたテキストを作ろうとする鄧輝燿の意図をうかがうことができる。

中国で作られた「二十四孝」説話は後世、中国のみならず、韓国や日本、ベトナムなど東アジア地域に伝播して大きな影響を及ぼし、また各国の国情に合わせて様々に変容した。本稿でとりあげた鄧輝燿の『四十八孝詩畫全集』は19世紀後半すなわち阮朝後期に著わされた関連著作の一つであり、ベトナムにおけるそのような動向を示す貴重な資料といえよう。

28) ハノイ漢喃研究院蔵『四十八孝詩畫全集』(AC.16)、第1葉表裏、第2葉表裏。

